

令和 元年 6 月 18 日現在

機関番号：32644

研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）

研究期間：2016～2018

課題番号：15KK0058

研究課題名（和文）靺鞨・渤海・女真の考古学的研究（国際共同研究強化）

研究課題名（英文）Archaeological research of Mohe, Bohai, Jurchen (Fostering Joint International Research)

研究代表者

木山 克彦 (Kiyama, Katsuhiko)

東海大学・清水教養教育センター・講師

研究者番号：20507248

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

渡航期間： 6ヶ月

研究成果の概要（和文）：本研究では、北東アジアにおける古代から中世にかけての集団の統合、瓦解、再編の過程と周辺地域に及ぼした影響について、考古資料の検討から、実証的に跡付けることを目的とした。具体的には、靺鞨、渤海、女真を対象とし、各時代における地域集団の様相と交渉関係、次代への継承関係を考古学的に解明しようとしたものである。

ロシア沿海地方極東連邦大学に6ヶ月間滞在し、同大学を中心として、ロシア各研究機関に収蔵されている主に土器群を分析対象として、研究を実施した結果、各時期の土器群の概要を明らかにした。また靺鞨の形成・初期の地域性に関して、新知見となる成果を上げることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、北東アジアにおける古代から中世にかけての集団の統合、瓦解、再編の過程と周辺地域に及ぼした影響について、考古資料の検討から、実証的に跡付けることを目的とした。具体的には、靺鞨、渤海、女真を対象とし、各時代における地域集団の様相と交渉関係、次代への継承関係を考古学的に解明を目指した。

ロシア沿海地方極東連邦大学人文学部に客員研究員として、2018年2月～8月までの滞在し、同大学収蔵資料を中心として、ロシア極東各機関の収蔵資料の分析を加えた。結果、極東の靺鞨～女真の資料の土器編年大枠を構築できた。また靺鞨の形成と、靺鞨初期の地域的特徴に従来の知見を大きく超えた成果を得ることができた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to trace the process of integration and collapse of the groups and reorganization of them from ancient times to medieval times in Northeast Asia from the archaeological data. Specifically, it is an attempt to elucidate archeologically the inheritance relationship to the next generation and the aspect of the regional group in each era, targeting the Mokhe, the Bohai and the Jurchen.

I stayed at Far Eastern Federal University in the Primorsky Krai region for six months, and conducted research on mainly pottery groups stored at various Russian research institutes. As a result, I could grasp the outline of pottery groups at each period. In addition, I grasped new knowledge regarding the formation of the Mokhe and the regional characteristics, especially, in the initial period.

研究分野：北東アジア考古学

キーワード：北東アジア史 靺鞨 渤海 女真 土器編年 地域間交渉

1. 研究開始当初の背景

北東アジアでは、国家体制を築いた社会と狩猟採集社会との間、また国家内、集団内部において、直接的・間接的な交渉関係が重層的にみられる。当地域の歴史叙述は、在地集団自らの文字記録がなく、中国の史書を拠り所としてきた。その記録内容の重要性は疑いないが、分量が少なく、かつ中華思想の観点から記載されたものである為、当時の社会の実態や集団関係の動態を知る上で十分ではない。古代以来、数多現れた族集団と国家の内部構造や相互関係の実態、周辺地域に及ぼした影響を具体的に跡付ける為には物質資料からの検討が有効である。そして、各地域の物質文化に認められる共通性と差異の背景を、前代からの伝統、隣接地域や国家との関係、生産・流通網の変化等と関連させながら検討することで、当地域の歴史を具体的に描くことが可能となる。

6世紀頃、前代の諸集団を統べ極東全域に住地を広げた靺鞨族の成立は、古代における大きな社会変動である。その影響はサハリン、日本にも及びオホーツク文化の成立にも寄与した。この族集団による広域分布圏の確立は、その後の歴史展開の共通基盤となり、女真族、満州族にまで継続する。但し、靺鞨以来満州に至るまで一体の強固な集団ではなく、集団・国家内部にある地域集団が存在し、時期毎に集団間の関係性が変化しながら変遷を遂げたことが分かっている。共通基盤の端緒となる靺鞨においてさえ、7部の地域集団が存在し、その背景には前代の子孫集団が存在したことが指摘されている。そして、この地域性が靺鞨南部では渤海国が成立し、北部では独自性を保ち続けた一因とされる。同様に女真成立期においても後の中核集団とその他の集団は対立関係にある。当地域の歴史研究は、主に東洋史の分野からなされてきた。しかし、上記の通り、史書のみでの分析では、無文字社会における実相は十分に明らかにできず、考古学的な分析を加味した総合的な検討が必要とされている。

考古学の分野では、資料の多くがロシアと中国にあり、その情報は限られてきた。しかし近年では、政治情勢の変化から実際に現地へ赴き分析しうる資料が飛躍的に増加している。当研究の対象となる各時期についてもその詳細を検討できる態勢が整いつつある。申請者もこれまで幾つかの研究成果を提出してきた。靺鞨期に関する検討では、その斉一性と地域差を指摘し、地域差の背景に前代からの土器製作伝統を反映していることを明らかとした。また渤海土器の検討では地域差と土器の専門集団の有無から渤海領内における中心と周縁関係を指摘した。また北に位置するアムール女真文化の土器群の分析では、他地域と共通性の高かった土器群が、9世紀前半の渤海の侵攻や10世紀初頭の遼の侵攻を契機に変化し、独自の變遷過程を歩む様子を描き出し、渤海の瓦解とともに北部集団からの影響が南へ及ぶことを指摘した。

本研究開始前に行ってきた研究代表者の研究で一定の成果を挙げたと考えているが、未だ見通しの段階となっている。資料分析の質・量ともにより充実させ、地域毎に資料の詳細を整理し、内在する時系列的な地域伝統と地域間を繋ぐ関係性を紐解き、歴史背景を加味しながら、地域集団の動向と地域間関係の推移を復元する必要がある。

2. 研究の目的

本研究では、北東アジアにおける古代から中世にかけての集団の統合、瓦解、再編の過程と周辺地域に及ぼした影響について、考古資料の検討から、実証的に跡付けることを目的とした。具体的には、靺鞨、渤海、女真を対象とし、各時代における地域集団の様相と交渉関係、次代への継承関係を考古学的に解明しようとしたものである。

この目的の為には、基礎的だが、ロシアと中国の各研究機関に蓄積され未公表となっている資料を分析し、さらに野外調査を実施して資料の時空間的な欠落を補っていく、着実な研究が求められる。

尚、本研究は、同名の基研究若手研究(A)と同様の目的・研究手法である。違いとしては、上記目的を達成する為に、関連資料を収蔵する機関の資料に分析を加える為に、一定期間滞在して分析量を増やし、飛躍的に研究成果を伸ばそうとしている点にある。今回の分析対象としては、ロシアに集積されている資料に限定して行った。

また本研究では、主に土器群を分析対象とした。これは広域な研究対象に対して、質・量ともに分析に耐え、かつ可塑性の高さから地域伝統の把握と地域間関係を捉えうる資料だからである。また、当地域では、他の考古遺物に対する検討を实践する上でも不可欠な広域の土器編年すら存在しないことが大きな問題であり、その確立が急務であるためである。

具体的には下記の点を明らかにすべく、研究を進めた。

(1) 靺鞨期における各地域における土器群の特性の抽出とこの段階における地域間関係の検討

(2) 渤海期における各地域における土器群の特性の抽出と渤海内の地域間関係の検討。

併行する北部靺鞨土器群の特性の抽出。の結果との比較を通じ、渤海との地域間関係の検討。

(3) 渤海滅亡から女真成立期における各地域における土器群の特性の抽出とこの段階における地域関係の検討。

(4) (1)～(3)の成果から、地域内の伝統と変化を抽出し、靺鞨成立から女真成立に至る地域間関係を推定する。また東洋史で蓄積された先行研究を加味しながら、当該期の集団様相と再編モデルを作成する。

(5) 6世紀代から11世紀代の中国東北部・ロシア極東にかけての広域編年の確立を目指す。

3. 研究の方法

対象資料は、ロシアで未分析・未報告となっている資料が多く、現地での資料調査が不可欠となる。

その為、ロシア沿海地方極東連邦大学人文学部に客員研究員として、2018年2月～8月までの7か月間滞在し（内、1月は中国、英国での研究発表等の為、ロシアを離れている期間である）同大学収蔵資料を中心として、期間中、下記の機関の収蔵資料の分析を加えた（括弧内は対象資料の時期・文化名）。

・極東連邦大学附属博物館、同大学附属渤海研究センター、同附属博物館（初期鉄器時代、靺鞨、渤海）

・ロシア科学アカデミー極東支部（初期鉄器時代、靺鞨、渤海、ニコラエフカ文化、女真）

・アルセニエフ博物館（初期鉄器時代）

・アムール州立博物館（初期鉄器時代、靺鞨、女真）

・ブラゴベシエンスク教育大学（初期鉄器時代、靺鞨、女真）

・ハバロフスク郷土博物館（初期鉄器時代、テバフ文化）

尚、当初予定していた研究計画では、ロシア科学アカデミーシベリア支部、サハリン国立大学での資料分析を行う予定であったが、先方機関の夏季野外調査期間との日程が折り合わず、実施できなかった。その為、アムール州での資料分析を追加変更することにした。同州の資料は、ロシア科学アカデミーシベリア支部が有している資料と基本的には同じ時期・文化の資料である。

また新規資料の追加を図る為に野外調査を計画していたが、研究代表者が主体となって実施する調査は、金額及び日程的事情から断念せざる負えなかった。その為、ユダヤ人自治州でハバロフスク郷土博物館・東京大学の共同調査に参加し、アムール中流域の初期鉄器時代～靺鞨期の資料増加を図ることとした。

4. 研究成果

本研究で得られた研究成果は、下記の通りである。まず対象とした靺鞨、渤海、女真の各時期の土器は、上記研究機関での資料分析の実施によって、各時期の土器群の特徴を明らかにすることができた。また編年についても凡その枠組みはできた。

靺鞨については、以下の点で顕著な実績を残すことができた。靺鞨の形成に関しては、ロシア沿海地方において前段階の初期鉄器時代ポリツェ3期からの移行形態であるブラゴスロベンノエ段階がアブラモフカ3遺跡で確認できた。この類型は、既にアムール流域において確認されていたものであるが、ロシア沿海地方においては未確認であった。

従来、次のナイフェリト段階で極東全体が短期間のうちに斉一的になると考えられていたが、アムール流域と沿海地方においては、初期鉄器時代のポリツェ3期から同一の文化圏を形成し、連動しながら展開していくといえる。尚、土器付着炭化物による放射性炭素年代の測定を行った結果、4世紀中頃～6世紀前半となり、想定年代と凡そ整合的であった。

また靺鞨の地域性と沿海地方における靺鞨から渤海にかけての系統性については、資料分析の結果から、土器群の地域的・年代的類型を認めることができ、従来の理解を深化させた。特に、沿海地方におけるシニェリニコヴォ遺跡の資料分析では大きな成果を挙げることができた。同遺跡における近年の調査では、住居群が発掘され、時間的に纏まりのある資料群である。これらの土器群を分析したところ、靺鞨罐最初期段階からやや新しく渤海代以前の資料である事が分かった。すなわち沿海地方においては「ナイフェリト」段階が新旧2分できることが判明した。また合わせてこの段階においては、南西部の高句麗土器の影響を受けていることも推測することができた。

以上の成果を纏めれば、沿海地方では、靺鞨罐ブラゴスロベンノエ段階にアブラモフカ3遺跡、ナイフェリト段階古段階にトロイツァ湾、ナイフェリト段階新段階にシニェリニコヴォ遺跡・チェルニャチノ5遺跡最古段階・クラスキノ最下層という編年序列が見出せた。今後の課題は、アムール流域との対応関係の把握となる。

アムール州の調査では、初期鉄器時代の地域的特徴、靺鞨罐に至るまでの彼の地の現在の編年認識を詳細に把握できた。当地の編年は、ミハイロフカ型・ナイフェリト型・トロイツコエ型が、出現年代に新旧ありながらも同時併存するという、日本のみならずロシアの他の地域の研究者からみても特異な見解が共有されていた。但し、筆者の資料分析から見ると、ミハイロフカ/ポリツェ3期 ナイフェリト トロイツコエと従来の靺鞨罐変遷を遂げるという見通しを得ている。その証左のひとつが、ペロベリョソヴォエ遺跡出土資料の分析からナイフェリト型からトロイツコエ型に靺鞨罐が移行することが確認できたことである。すなわち、靺鞨罐の変遷は、その他の地域と変わらないことになる。但し、初期鉄器時代後半のポリツェ3期とミハイロフカとの関係や、同土器群から靺鞨罐へどのように移行するのかが、解明できなかった。上述のブラゴスロベンノエ段階は、現時点で同地域に見つかっていない。一方で、ミハイロフカからナイフェリト型への移行形態を示しそうな叩き目を持つ靺鞨罐も存在する。この点は今後、資料増加を図り解決したい。また当地域のトロイツコエ型についても、その特徴は沿海地方と大まかには一致しているのであるが、叩き目を持つ資料が非常に多い。この点は、大興安嶺を越えた室韋と比定されるブルホトゥイ文化との関係を検討してみる余地があるのではないかと現時点では想定している。

ハバロフスク地方での野外調査と資料調査では、主に前者が初期鉄器時代前半の資料、後者が初期鉄器時代後半とアムール河口部の靺鞨併行期の資料を中心に検討できた。本研究計画からすると、やや対象がずれるものとなったが、いずれの資料も日本においては、検討が進んでいるとは言えない為、資料蓄積ができた点で成果を挙げることができたものと言える。

これらの分析成果については、靺鞨に関する土器からみたその地域性と、編年関係、地域性を生む背景が形成以前の文化圏が係わっていることについての推測は、国際シンポジウムで公表している(研究成果(8))。またその他の研究成果の一部は、口頭発表で既に公表しているものもあり(研究成果(3))については、論文として公刊すべく作業を進めている。

渤海、女真期に関する研究では、ロシア沿海地方、アムール州の各機関での資料分析を加えることにより、両時期の資料の具体的な内容を深めることができた。一方で、研究進展の結果、特に10世紀から11世紀にかけての系統性や、アムール流域と沿海地方の地域間関係については、既存資料だけでは、十分に捉えることができないという課題にも直面する結果となった。この点は当初の研究計画の目標を達成できなかった点である(上記の目的(2)と(3)にあたる)。今後の野外調査による新資料蓄積によってのみ解決できる問題である。

但し、本研究計画で得られた各時期的・地域的な特徴は、当該領域の研究の今後の基礎となるものであり、現在、分析内容を公刊すべく作業を進めているところである。ロシア側の自国での調査も進展著しいため、本研究で得られた成果と新資料を加味して、今後上記の課題を達成する基礎としたい。靺鞨に関しては、当初の検討項目は達成できた。通時的広域的な編年についても大枠は作ることができた(上記目的(5))。

ロシアでの資料分析の実施は、当初研究計画で目的としていたもの以外の成果も齎した。ロシア沿海地方の資料実見の成果の一部として、同地方の靺鞨展開前にあたる青銅器文化の現状について纏め、公表した(研究成果(1))。靺鞨併行期に関しては、より広い範囲も視野に入れることができた。大陸での靺鞨の成立・拡大は、サハリン～北海道オホーツク海沿岸に展開したオホーツク文化に影響が及ぶことが知られている。同文化の有孔砥石を集成・実見する中で、同資料の類例が大陸部に存在すること、大陸からの招来品である可能性に思い至った。その為、ロシアの上記機関において、同地域で有孔砥石が出土する青銅器時代から中世までの資料を実見・分析し、オホーツク文化の有孔砥石は大陸の文化から(靺鞨文化成立期か?)の招来品であること、また靺鞨の影響が減じ、本州の影響が増大するとともに同資料がなくなること指摘し、靺鞨とオホーツク文化の交渉関係の推移に新たな知見を提示した(研究成果(7))。国際ワークショップで発表したが、現在論文化に向けて作業を進めている。同様に靺鞨が北海道のオホーツク文化にどのように影響を及ぼすかについても纏めている(研究成果(11))。

尚、ロシア沿海地方の渤海期に関する資料分析は、モンゴル国での研究代表者の契丹に関する調査でも生かされている。渤海は10世紀代初頭に契丹に滅ぼされるが、その後渤海の遺民は、契丹領内各地に配される。史書の記載によれば、モンゴルの国防衛の拠点となる城にも連れていかれる。この一つが研究代表者の調査地であるチントルゴイ城である。この遺跡の土器窯の調査から、その土器の特徴に渤海の徙民痕跡を見出すことができる可能性を指摘し、発表を行った(研究成果(6))。

モンゴルなど草原地域と本研究の極東地域は、その生態系の違いから生業が異なる為、一見すると集団や歴史展開が異なるが、隣接地域となっており、密接な関係を有している。上記の例は一例である。上述の通り、靺鞨の西限地域であるアムール州の資料では、更に西方にある諸文化との関係について検討する余地がある。

尚、本研究遂行中に別にモンゴル地域とロシア極東地域との関連についての研究を進めており、モンゴル東部国境(靺鞨の西部境界)地域での調査を実施している(研究成果(2)(9))。靺鞨や渤海と併行の囲壁を有する基壇遺跡に関する調査成果であるが、ここにも上記した想定を加味している。今後、本研究で得られた成果と比較参照しながら、モンゴル東部の在地集団であるブルフォトイ文化との関係を検討する予定である。

以上のように、研究は概ね順調に進展したと考えている。これまでの研究で蓄積できた成果の公表も随時行ってきたが、今後、得られた成果をなるべく迅速に公表するように現在取り組んでいる。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計1件)

- (1) 木山克彦「ロシア沿海地方の青銅器時代」『季刊考古学』135号、48～50頁、雄山閣(2016, 5) 査読無し

[学会発表](計8件)

- (2) 木山克彦・L.イシツェレン・笹田朋孝・佐川正敏・大澤孝・正司哲朗・T.アムガラントクス・L.ムンフバヤル・N.ナムダク「2018年モンゴル国オルズ川流域の考古学調査」『第20回北アジア調査研究報告会』69～72頁、北アジア調査研究報告会実行委員会(2019, 2)

- (3) 福田正宏・M. Gablirchuk・國木田大・田尻義了・M. Gorshkov・江田真毅・木山克彦・A. Malyavin・夏木大吾・足立達朗・張恩恵・太田圭・田邊えり・熊木俊朗「ロシア・ユダヤ人自治州における考古学的調査(2017・2018年度)」『第20回北アジア調査研究報告会』9～14頁、北アジア調査研究報告会実行委員会(2019, 2.24)

(4) 臼杵勲・佐川正敏・柳本照男・木山克彦・内田宏実・正司哲朗・Ch. アマルトゥフシン「匈奴の瓦磚生産と供給および秦漠との比較研究-モンゴル国ホスティンボラグ第3遺跡1号窯跡の調査-」『日本中国考古学会 2018 年度大会』43～50 頁、日本中国考古学会(2018, 11.10)

(5) И.Үсүки・M.Сагава・K.Кияма・T.Янагимото・K.Мацүшита Хустын булагийн шавар ваар болон шатаахзуухны судалгаа.Хүннүгийн хот суурин ба үйлдвэрлэлийн түүхийн асуудалд. Төв, Монгол Улс (2018 , 9.5)

(6) Kiyama Katsuhiko and Usuki Isao The features of Kiln of Xiongu and Kihitan in Mongolia. *SEAA* 8. Nanjin University, 10th June 2018

(7) Yamaya Fumito and Kiyama Katsuhiko The perforated whetstones in the Okhotsk culture. *Мультидисциплинарные исследования в археологии : пространственная археология*. ДВО-РАН. Владивосток. 14 мая 2018

(8) Kiyama Katsuhiko Archaeology of Mohe- Medieval archaeology in Far East Asia. *The 5th Workshop of Biological Anthropologists*. Institute of Archaeology, University of Oxford, 23rd March 2018

(9) 笹田朋孝・木山克彦・L.イシツエレン・G.マルガドエルデネ・白石典之「モンゴル国東北部オルズ川流域の 2017 年度踏査報告」『第 19 回北アジア調査研究報告会』43～46 頁、北アジア遺跡調査報告会実行委員会編(東京大学 2018, 3.10)

〔図書〕(計 2 件)

(10) И.Үсүки・M.Сагава・K.Кияма・T.Янагимото・C. Учида・Л.Ишцэрэн Хустын булагийн шавар ваар болон шавар олдворын судалгаа. *Зүүн байдлагийн голын сав дахь археологийн дурсгалууд*. ШЦУА археологийн хүрээлэйн. сс.126-155 (2018 , 8)

(11) 木山克彦「オホーツク文化」『海洋考古学入門』72～75 頁、東海大学出版部(共著書)(2018, 5)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年:

国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等 特になし

6. 研究組織

〔主たる渡航先の主たる海外共同研究者〕

研究協力者氏名: V.A.デリユーギン

ローマ字氏名: V.A.Deryugin

所属研究機関名: 極東連邦大学

部局名: 人文学部

職名: 准教授

〔その他の研究協力者〕

研究協力者氏名:

ローマ字氏名: